蜜柑

原　雅子

かつて砂丘だったという小高い丘に沿った通りを、途中で折れた突き当たりに、半分開いた深緑色の鉄の門扉が見える。しっかり閉じればどこかがもろけてしまいそうな門だ。そこを通り過ぎ、玄関へのアプローチで志津子は車を停めた。珍しく松毬が散在し枯れた松葉がタイルのアプローチに折り重なっている。

玄関のチャイムを三度押してやっとでてきた石崎弥生に、志津子は目を見張った。

虫食い穴のある小豆色のセーターに、毛玉があちこちについた緑色のロング・スカートを着け、手にティッシュペーパーの箱を抱えて弥生が立っていた。垂れ下がった目蓋や色のない唇、髷に結った白髪のふえた髪は崩れて、一瞬人違いかと思わせるほどであった。

「トイレにいくところなの」

弥生はそういって志津子にほほえみかけた。

「よく来たわね。どうぞおあがりなさい。二階へ行って待っててね」

棒のような声がまた志津子を混乱させた。蜜柑の箱を抱えて玄関に入ったものの妙な胸騒ぎがした。

三日後の新年が嘘のような気がする。

残り少ない松林の中に五十年も前に建てられた洋風日本家屋の中は薄暗く、昼間なのに雨戸が閉まっている。玄関の脇にある出窓からの明かりが、奥の廊下に仄かな光をあたえているが、その半分は闇にちかい。正面に置かれた古めかしい衣装掛けの鏡が、廊下の先を写し出し、ずっと奥へかぎりない広がりを見せている。この広がりに闇へと導かれていく不気味さをおぼえ、志津子は打ち消して鏡から目をそらせた。日ごろはよく磨きこまれて黒光りしている廊下は、今日は白い黴のような埃がおり、砂のざらついた感触が、志津子のストッキングを通して足の裏に残る。

スリッパを弥生先生は出してもくれなかった、と訝りながら廊下を進む。出窓や廊下の途中に活けられた花だけは色鮮やかで、ピンクの薔薇は薄暗い壁のくぼみのなかで、息を

している唇のようになまなましかった。
二階への階段は廊下が切れるすこし手前から突然はじまる。志津子は階段にたどり着いたときには、すこしほっとした気持ちになって、蜜柑をかかえて上がることだけに心を集中させた。
蜜柑は到来物だが、あまりにも新鮮でつやつやしていたので、車のトランクに積んでほとんど衝動的に持ってきてしまった。正月にきまって集まる、夫の多くの来客の準備で時間の余裕はなかったにもかかわらず、弥生が一年中オレンジを絞って飲む習慣があるのを咄嗟に思い出したからだった。弥生の実家は静岡にあり、現在では弟や妹の家族が同じ敷地に暮らしているということだった。長い休暇の折にはそこへ帰省することになっていた。弥生の部屋がその中に作られているのだそうだ。しかし、弥生はここ、二、三年新年の休暇を静岡には帰らず自宅で過ごすと聞いていた。以前にも届けたことがあったが、喜ばれたのを思い出したのだ。
弥生は教会のバイブルクラスで英語の聖書を教えており、志津子も一年余り前からクラスに通うようになっていた。
七十歳を越えていると聞いていたが、弥生の白い顔はみずみずしさを失わず、不思議なほど皺が見えない。歳月は彼女の骨にだけ深い年齢を刻んでいるのかもしれない。独身で十年くらい前までは女子大学で英文学の教授をしていたという。二十代の前半にアメリカの大学に単身留学し、数年学んだことは、未だに言葉の端々に現れていた。
ある日、バイブルクラスに思ったより早く着いてみると、数人の生徒たちが志津子を見るともなく見ながら喋り続けた。
「牧師さんだったんですって、先生のボーイフレンド。でもその牧師さんさよならしたらしいのよ」
「牧師さんだなんて、嘘でしょう。あたしも聞いたけど何だか感じがちがうみたい。どんな男性だって、先生を振れるもんですか」
「あらあら、親衛隊はちがうわね、やっぱり」
弥生は瓜実顔で切れ長の目が涼しく、いつも化粧気のない顔に、口紅だけは鮮やかに塗っている。なぜかそれが凛と見えるのだった。そう見えるのは背筋を伸ばしてしっかりとした足取りで歩くせいかもしれない。長身で白髪の少ない髪は一年中髷に結われて、白いうなじを強調していた。長い首に巻くスカーフの結び方を百種類も知っているかのようにさっと手を動かすだけで、見る間に一枚のスカーフやアクセサリーを自在に使いこなした。

どんな物を着てもぴったり似合い、そのファッションはかならず誰かが真似をした。目を合わせるたびに同性ですらどぎまぎするような存在だった。

何か変な臭いがする。魚を焼いたのでもなく、ゴムがもえたのともすこし違う、毛髪、紙、何の臭いだろう、と蜜柑の箱をもって階段を一気にのぼった指の痛みに、手を揉み合わせながら志津子は首を鳥のようにつきだして、臭いの根をさぐった。迷いこんだ空間ともいえる弥生の居間には、確かに何かが焼けた空気が漂う。

二階の部屋はすべて弥生が使用し、階下は応接間を除いて留守番の老夫婦に貸していた。が、人の気配が感じられないので、おそらく長く留守なのだろう。

つねに片付けられ、人を寄せ付けないほどの冷たささえ見せていた部屋の中で今日は中心に据えられた丸型のテーブルの上に雑誌や衣類が滑り落ちそうなほど盛られている。時には真珠の光沢をおびていたベージュ色のじゅうたんは全体に沈んだ色合いに変化していた。弥生の古い籐製のデスクの上にも手紙や本が溢れている。机の前の椅子の下に散らかっている紙くずを拾おうとして、志津子は愕然とした。あの時の文箱がそこに置かれているのだ。飴色の蓋の一部分が擦れてはげ、ささくれだった木の肌を見せている文箱。

三十人程度の女子学生や主婦で構成されているバイブルクラスを、弥生はわずかな報酬で二十年も受け持っていた。志津子はべつにクリスチャンではなかったが、聖書を通して英語を学べたらというくらいの軽い気持ちで参加していた。通い始めてまだ一年ほどしかたっていなかったが、母娘で引き続いて出席している人たちの中には、

「わたしたち、ちょっと極端な例かもしれないけど、どうも母とまったく同じお話を聞いてるみたいなのよね」

娘のほうがこっそり零したことがあった。

教会のなかでもそろそろ新しい人にかえようという意見がおきてきて、あるミッションスクールの聖書の教師が、新年度から後任者として来る予定になっていた。

弥生には最後の日まで知らされず、だしぬけにパーティが開かれ、高価な木彫りの文箱が贈られた。

新しいクラスの始まった日、新任の遠野良子が教室に入ってみると、出席者は七、八人しかいない。三十人あまりと聞いていたのに、と賛美歌を歌うことからはじめた。

（あまつましみず　ながれきて　あまねくよをぞ　うるおせり　）

中庭を隔てたプレハブの集会所から、同じ賛美歌がより大きな音量で聞こえてきた。
「こんなことだったなんて」
良子は中庭の桜の大木の花びらが窓から舞ってきて、心地よい初めての朝をおしむようにかぶりを振って窓を閉めた。
同じ賛美歌は弥生が新たに始めたクラスから聞こえてきたのだ。
二十人ほどの以前からの生徒がいて、同じようにカリキュラムは進行されていた。一人一人に聖句を読ませ、弥生が英語と日本語で熱弁を奮っている。窓を閉めてもその割れた大声は容易に聞きとれた。
遠野良子はおどおどしながら、それでも何とかクラスを終えた。
「ずいぶんひどいやり方ね」
ひそひそと囁く声がどこからともなく聞こえてきた。

翌週もまたその翌週も同じように、初めのころよりはるかに大っぴらに弥生のクラスがつづくので、ついに牧師が弥生の家へ出かけていった。
「石崎先生、蔦が見事ですね」
弥生の家は高台の石垣の上にあり、その石垣に蔦が緑のカーテンを作っていたのだ。
「おはようございます」
生真面目に答えたっきり、弥生はぷいと横を向いてしまった。まるで敵に身構えるような様子で、唇の端には怒りがあらわに浮き出ていた。
どうぞ、とも言われないのに、灰色の量の多い髪をかきあげつつ牧師はさっさと靴を脱いであがってしまった。彼女はその勢いに押されて、応接間に通した。牧師はソファに腰掛けると、額の汗を拭った。そして、長い脚を組み気持ちを落ち着かせるように深呼吸をした。
弥生はフリルのついた白いブラウスに藤色のニットの長いスカートを穿き、顔を上向きかげんに自分に椅子に座った。
「こういうのを、いいお天気だというのですかな」
弥生は牧師を見ようともしないし口を開こうともしない。
風がレースのカーテンを揺らせ、庭の大きな欅の木が部屋のなかに薄い陰を落としている。ドアの反対側の隅には、ライラックの鉢がおかれ、その香りが部屋中にみちていた。
「素晴らしい香りですね。ライラックは」

それでも弥生が答えようとしないので、物柔らかな口調で話しはじめた。
「お願いにあがったのですよ、今日は」
弥生は目をあげずにじっとしていた。そして前方に視線をなげかけたままの姿勢で呟いた。
「わざとやっているんですのよ、わたし。お気づきのはずだわ。これからもやるつもりです」
牧師は凍りついたように弥生を見つめた。
「どうしてそんな目をなさるんです。もっと分かりやすく言ってさしあげましょうか。…さあ、ごらんになってください」
彼女は長いスカートを片方に寄せた。
牧師は見た。
彼女の足はあの木彫りの文箱のうえに乗せられている。彼は視線を文箱から弥生に移した。牧師の顔は徐々にこわばり、表情が少しずつ黒ずんでいく。その狼狽をしたともいえる眼差しをうけて、彼女はやっと頭をあげた。
そして笑った。まるで叫び声をあげているように口じゅうをいっぱい開いて。
「もうお分かりね。素敵な足のせだいだと思ってますのよ、わたし」
「どうして、また……」
牧師が言いよどむのを彼女は遮って言った。
「すこし切り口上で申し上げましょう。わたしがあなたのために勤めてきたことをわかって下さいますわね……」
言葉をそこで区切ると、弥生は静かに俯いた。そして足を文箱からはずし、屈んで蓋をとり、中から封筒をとりだした。
「切り口上だなんていって、ちっともそうならないから、口惜しいわ」
「＜ 先生の業績はとても評価しております。長年にわたり、献身的なご協力に対し、心より感謝申し上げます。しかし、年齢から考えてお仕事がすこし過重なのではないかと心配しております。＞ これが文箱についていた手紙の文面です。何というダイジェストでしょうか…。ついでにいうと、記念品の文箱もダイジェストといってもよろしいわね…。だから、わたしも簡単しごくに利用しようと考えましたの……」
弥生はふたたび文箱のうえに足をおいて、殊更につま先を上げて見せた。
牧師は弥生のほうにではなく宙に向けた視線を動かさなかった。長いあいだの牧師生活

に、ついぞなかった時間が今やってきている。
「わたしは心をきめましたの」
弥生は文箱の上のつま先をゆっくりとまわした。
「わたしは今まで通りやっていくつもりです。そしてあなたが止めにいらっしゃるのを待っていますわ」
すべてのことを詫びて、神が良い解決をしてくれることを祈ると細い声で言う牧師に、弥生はきっぱりとした言葉を放った。
「お祈りは役に立ちませんわ。そうでしょう。神様とはずっと遠い場所で話していますもの」

それにしても先生は遅い、と志津子は不安を感じはじめた。今日は蜜柑をわたしてすぐ帰るつもりなのに。このまま立ち上がるわけにはいかない。
バイブルクラスの人数が逆転したとき、弥生は自分の家でやろうと提案し、弥生を支持する友人たちと、この家に志津子は初めてきたのだった。弥生の美しい発音や優雅な身のこなしは女性としてとても魅力的だった。
古い家なので手を入れる必要のあるところが多く、弥生は教会の仕事を長年やっている大工の岡本にすべてを委ねていた。
岡本は弥生より五、六歳年下のようだが、すでに息子に跡を譲り、自分の好きな仕事だけをしていた。暗い目つきの小柄な男で、いつも着ているジャンパーの袖口から出ている手が小さくて白いので、誰もが大工だとは思わない。岡本は「先生、先生」と弥生を呼びその度に、「はい、はい」と応じる風景はかなり親しい間柄を思わせた。
弥生の家に通うようになり、そのつど岡本と顔をあわせるので、いつしか、「先生があんな大工さんと」という噂が流れるようになった。そんなことには気にもとめず、弥生は上機嫌で食事を二人分作ったりしてうきうきとして見えた。
「男手ってやっぱり必要なのね。志津子さんの家、何か修理するところはないかしら?」
弥生は声まで明るくなった。
「はあ、別に、結構です」
志津子は急いで断ったものだった。
クラスは一週ごとに人数が減っていった。志津子の小学生の息子がインフルエンザで休んでいたためクラスを欠席しているうちに、三人しか集まらない週もあったらしい。志津

子の気がかりをよそに、弥生はいつもよりもっと熱心に、参考資料のコピーを配ったりして、クラスに力を注いだ。

途中でティータイムとして手製のフルーツケーキに紅茶を淹れて生徒に振舞い、「岡本さんもどう？」と廊下を歩く彼にふざけたように馴れ合いの言葉をかける弥生の姿は少女めいてさえ見えた。岡本の服装が次第に洗練され、センスのいいチェックのシャツを着ていたり、ゆったりとしたジーンズのズボンに変わっていった。それと共に、弥生も淡い色合いのセーターに洒落たネックレスをつけ、華やかなプリーツスカートをはくようになっていった。

志津子は文箱の上の紙屑をすて周りを片付けて、部屋中にたちこめている濁った空気を追い払おうと、机の上の窓をずらした。

いまだに聞こえてこない足音を気にしながら、志津子は門の外の通りを抜ける車の音を耳で追い、腕時計を何べんも覗いた。

まさか、トイレで！と考えた途端、階段を一段ずつ踏みしめる気配がして弥生が姿を現した。

「遅いなあって思っていたでしょう。早いときもあるのよ」

弥生はゆったりとした調子で話しかけてきたが、志津子は三時までには帰宅しなくてはならない。年末の準備のための花屋や菓子屋や魚屋のことが頭をよぎった。

「お蜜柑をどうぞ、いただき物ですけれど。今日は急ぎますの。先生どうぞよいお年をお迎えください」

事務的な声を残してすくっと立ち上がりかけた志津子を制するように、弥生が両の肩をすくめた恰好で、左の人差し指を曲げた。

「傷んだ蜜柑はべつにしなくっちゃ、ほかのものが可哀想だわ」

弥生は箱から一つ一つ取り出し、頷く素振りをみせて何やら呟きはじめた。髷が崩れかかって後れ毛が顔にまつわりつき、むくんだ顔はぞっとするほど表情を失っている。

それから、彼女は当たり前のような手つきで、ベッドの下から小さな年代物のガストーブを引き出してきた。その上に乗せられた錆のういた金網には、何か焼いたあとがこびりついていた。臭いの根元はこれだったのかと志津子は気づいた。

何かいわなくてはならない。志津子はそう思ったのだが、言葉が出てこない。

弥生はガスを自動点火すると、蜜柑を網の上に乗せた。網に付着した焦げくさい臭いと、

蜜柑の皮に火がついていく。煙が漂いはじめた。志津子は体中が震えだし掌はべたべたと濡れてくるのを感じた。

洗面所に行こうとしたのはむろん両手を思い切り洗い流すためであった。

途中で、開いていた寝室に入ってしまったのは偶然だったが、ベッドの頭部のあたりに皺になった便箋がみえた。枕のそばに落とされた封筒には「…神崎郡前川町大字花田　塩田様方」とあり、岡本の名前がはっきり読めた。岡本の娘の嫁ぎ先のようだ。

「あ、ちょっと。どこへ行くの」

弥生は咎めるような声で志津子を呼んだ。

「あ、ちょっと」

二度目に弥生によびとめられたとき、志津子は何も考えることができず、あわてて階段を駆け下りていた。息苦しくなるような臭いと乾いた平たい声が背中に貼りついていた。